

6・7世紀の手工業生産と

地域の編成

京都府立大学 菱田哲郎

富士市の中原第4号墳は、独特の横穴式石室をもつ円墳であるが、豊富な副葬品をもち、地域を代表する有力者が埋葬されたと推測される。この6世紀には、各地の開発が進められるとともに、豪族たちによる造墓も活発におこなわれており、新しい技術を入手した豪族たちが開発の中心にあったと見ることができる。副葬品として、都からもたらされるものも多く含まれ、刀剣や矢束などは、王権との関係を物語る文物として副葬されたと推測される。豪族たちが都との間の交通をおこなっていたことが地域の開発にとっても重要な役割を果たしていたと推測される。

中原古墳群が築造された6世紀という時代は、筑紫君磐井の反乱のような軋轢もみとめられるものの、王権による地方支配が充実し、国造や伴造として豪族たちが位置づけられるとともに、王権に奉仕する拠点としての屯倉も各地に配置されるようになっていった。もちろん、地域ごとに王権との関係には違いがあったと考えられるが、屯倉が水田経営のみならず、交通の拠点でもあったように、都を起点とする交通が全国に及んでいたことは確実である。したがって、交通の要衝がまず王権と深い関係をもつことが観察されることも多い。

王権との関係を古墳などの遺跡・遺物から探ることは、必ずしも容易ではない。在地的な要素がさまざまなものに見られ、たとえば王権との関係の深さを石室の形態から推し量るというわけにはいかないからである。しかしながら、副葬品の中に王権との関係を示すものは看取でき、豪族の直接的な交通によるのか、交通路を通ってのものの流通によるのかという点はあるけれども、一定の関係を想定することができる。文献を援用するならば、舍人や采女のように、地方豪族の子女が中央に出仕することは普通に見られ、また蘇我氏や物部氏といった中央の豪族に従属する形で地方の豪族が中央に出向く場合も確認されている。このような交通により、さまざまな文物が都から各地にもたらされたことは確実視できる。

7世紀以降、各地の豪族たちは伝統的な勢力として、郡司に任じられていくことになる。一ヶ郡に有力豪族が複数存在する事例も史料から確認でき、郡司層に成長した豪族は、各郡に数氏あったとみてよい。中原古墳群の場合も、富士郡内の有力者の一つとして位置づけることができ、在地貴族として奈良平安時代へと続いたのではないだろうか。逆に言うと、律令期の地域の基盤が6世紀に形成されていると言え、その開発の中心になった豪族たちが、古代を通して地域を代表する勢力になっていたと推測できる。このような有力者の消長を遺跡は語ってくれるのである。



6世紀後半の東アジア



中原第4号墳の位置